

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	語形成の研究：英語の複合名詞について〈修士論文及び卒論要旨〉
Author(s)	神笠, 公伯
Citation	広大言語, 8 : 54 - 55
Issue Date	1968-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046298
Right	
Relation	



このテーマと関連して、二つの比較形式間の選択を決定する要因は何か、ということもまた重要な問題であった。その反体面は第三章で、そして第二章では、形態面より述べ、現代英語をより深く理解する為に、17世紀と18世紀の英語も調査し、用法の時代的差異を参考にした。

fluctuation の原因を全て考察するには、データが少なかった。今後更に多くのデータを集め再検討の必要があろう。

(文責本人)

語形成の研究 —— 英語の複合名詞について ——

神 笠 公 伯

Jespersen を中心にして複合語とは一体何であるか、又複合語の中でも最も問題が多く歴史的にも古い複合名詞には、どんな種類があり、句との境界線をどこに求めるか等を主題とし、主として Marchand のものと比較検討しながら述べていく。

第一章では「語形成とは何か」を論じ、第二章で(1)音声的に、(2)形態的に、(3)意味的に「複合語とは何か」を論ずる。第三章で「複合名詞の結合形式」を(1)形態的に、(2)機能的に見る。

複合語の基準として常にあげられるものは① Meaning ② Stress ③ Spelling の3つである。Marchand は Stress を最重要視し、Jespersen は歴史的・伝統的立場から意味の特殊性を重要視する。しかしながら、結局Jespersen を支持するにしても、Zandvoort の言う様に「どの様な語結合を Compound と見なすかは、大いに話者、筆者の意図にも依るし、聞き手、読者の言語感覚にも依る」ということに落着く。この意味からしても、今後研究すべき多大の問題点が潜在していると思う。

参考文献

- Bloomfield, L. Language, 勇 康雄訳 英語学ライブラリー (39)
Bradley, H. The Making of English
五 島 忠 久 数と性・英文法ライブラリー (7)
Jespersen, O. A Modern English Grammar on Historical
 Principles Vol. II, VI
 " Analytic Syntax
 " Essentials of English Grammar
高 津 春 繁 印欧語比較文法・岩波全書

- Kruisinga, E. A Handbook of Present-day English, Part II.
 小 西 友 七 意味は複合語の基準になるか (水門第6号より)
 Marchand, H. The Category and Types of Present-day
 English Word-formation
 中 島 文 雄 英語発達史・岩波全書
 " 英文法の体系
 Potter, S. Our Language
 " Language in the Modern World
 Sapir, E. Language 言語 泉井久之助訳
 Smith, L.P. The English Language
 Sweet A New English Grammar
 上 野 景 福 語形成, 英文法ライブラリー (25)
 Weekly, E. The English Language
 Zandvoort, R.W. A Handbook of English Grammar
 (文責 森岡敬史)

英語のアスペクトについて —— 完了形を中心に ——

藤 原 彌 生

aspect とはいかなる事象であろうかという疑問から始められた。この研究は、元来デリケートな、把握難い aspect という事象を、英語において、認めようと試みたものである。英語においては、aspect の範疇と tense の範疇が明確に区別されていない為に、まず英語の aspect を認めるには、tense 範疇からそれを取り出す必要がある。そこで完了形に焦点を絞って、その aspect の性格を明らかにする為に、意味、機能の考察を行っているものである。

まず I でアスペクトの一般的考察を行い、I) では、次のように、aktionsart と aspect との関連において、定義している。

aspect は話者が動作を把握する場合に、任意に視点を定め、それにより、動作を進展の内において考えるか、外において考えるかを区別して表現するところの文体論、形態論的な範疇である。aktionsart は、動作の行なわれる様態の違いによって区別される語の意味の範疇である。(以